

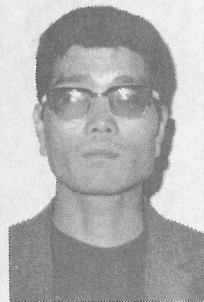
四人の方に

卓越した

た結果、ハニーバンタムをトンネルの一部に試みてみました。そして、なかなか良い結果が出ましたので、ことしからは、トンネル栽培は、スイカとハニーバンタムを取り入れたいと思います。また、後作としては、洋菜をつくろうかと考えております。そして、ハウスでの春作はスイカにして、一部はメロンにする考えです。

そして、これからはより一層品質のよいものをつくるため、施設とトンネルを上手に利用して、無限の力を持った限られた農地からばく大なエネルギーを持つ、自然の恵みを利用いたしまして、可能な限りの収益を引き出す努力を、私はいたしたいと考えております。

伊藤敬二さん(尾垂一九六〇)は、肥育牛、水稲、露地野菜を主として経営していますが、特に、肥育牛は、町内の多頭肥育牛の先駆者であります。



【伊藤敬二さんの体験発表】
肉牛生産についての体験と成果について発表したいと思います。
肉牛を始めたのは十年前です。



体験発表する平山和敏さん

ある日、寄せ刈りをやっているうち、刈り取った草の処分に困り、時間をかけていたのですが、その時、学生時代にわざわざ草を刈って牛に与えていることを思い出し牛を飼ってこの草を与えることを考えたのです。まさに一石二鳥という感じでした。

で、昭和四十一年六月に、二頭の牛を買ってきました。それから朝・晩に草刈り作業が私たちの日課でございました。しかし、努力のいかにもなく牛は思うように太ってくれなかったのです。やはり、濃厚飼料を与えなければだめなのかと思い、魚を売り、また冬には野菜をつくってそれらを売り歩き帰りはそのもうけで、エサを買ってきました。

そして、その二頭の牛が元で、昭和四十二年には四頭、四十三年には十頭の大台になりました。しかし、技術的なことにおきまして若干の欠陥はありましたが、八日市場農業改良普及所の先生方、あるいは自分なりに先進地へ出かけ勉強してまいりました。

こうして頭数は順調に増やしてまいりましたが、頭数が増えるにつれて問題点が多くなりました。

第一に泥沼対策でございます。牛の腹のつくほどの深さ、泥の中に寝た牛、泥の中から首だけを出している状態の牛など、どれをとっても牛がプラスになることは一

つありません。

その後、いろいろな方法でやってみまして、現在のように三五〇kgから四〇〇kgくらいまでの牛は中央に山をつけた運動場でそれにコンクリートの追い込み式牛舎を併用し、雨降り後は三、四日、運動場に出さないということです。更に四〇〇kg以上になった大型の牛は、床面がコンクリートでおがくず利用の運動場なしで、完全追い込み式牛舎に追い込んでしまうのです。

第二に、労力の問題です。妻との二人ではどうしても労力は足りません。例えば、水の問題でも水道の口からいちいち水をはっていたのでは、延べ時間で一日二時間半くらいはかかっておりましたが現在ではボールタップ方式で、この牛がどれだけ飲んでも一定の水量を保つように工夫いたしました。

第三に、大型機械によります稲わらの不足でございます。

牛は反すう動物でありますので絶対にそ飼料がなくてはならないものです。一頭仕上げるには最少限一反歩、一〇〇頭いけば十町歩稲わらが必要です。今までは秋前に手をまわして予約をとり、また牛ふんと交換し、どうやら確保出来るようになりました。

〔注〕この発表は広報室の方で一部要約し掲載したものです。